

アーンドラ地方における神像彫刻について

—パニギリ出土の神像？彫刻の紹介を中心に—

A Report on Divine Statues in Andhra Pradesh: Focusing on the Introduce of a Divine(?) Statue from Phanigiri, Andhra Pradesh

永田 郁

Kaoru NAGATA

崇城大学芸術学部美術学科准教授

*Associate Professor, Department of Fine Arts, Faculty of Art, Sojo University

キーワード：アーンドラ地方、パニギリ、神像彫刻、ヤクシャ、パーンチャ・ヴィーラ

Keywords: Āndhra District (Āndhradeśa) , Phanigiri, Divine statues, Yakṣa, Pāñca Vīra

Abstract

This Paper aims at reporting the aspects of the divine statues in Āndhra district, South India, focusing on introduction of a divine(?) statues newly discovered from Phanigiri site, Andhra Pradesh. In 2008 & 2009, author made a survey of some Archaeological Museums at Andhra Pradesh such as Archaeological Museum, Amarāvati, the Amarāvathi Museum, Baudhasree Archaeological Museum, Guntur and Department of Archaeology and Museums, Andhra Pradesh. As a result of these researches, it came to get to know nine divine? statues including a image from Phanigiri which is introduced in this paper.

Each of these images is round statues as well as Buddha images at Āndhra district. Therefore it is considered whether those images were cult images in any temples at Āndhra district. Probably, these images will be very important also when we consider the aspect of the religious art of Āndhra district, South India. Although researches have been progressing about the Buddhist Art at South India, like Amarāvati and Nāgārjunakoṇḍa, there are many still unknown portions about the religious art, Āndhra district. That is, it is because exploring these images become a key which solves the aspects of the religious art, South India. : How were these images used under the Buddhist or Hindu temples ? Moreover through these divine statues, it is considered that we can trace the development of religious art, Āndhra district under post-Ikṣvāku period between 4th-6th century A.D.

はじめに

拙稿本誌第2号において「南インド・アーンドラ地方における宗教美術の様相について―なぜ菩薩像は造像されなかったか―を巡って」というタイトルで論文を発表した。そこで、アーンドラ地方に菩薩像が造像されなかった状況を試論的に検証し、「アーンドラ地方の社会においては新たな信仰対象である仏像とともに、ヒンドゥー教、旧来のナーガやyakshaをはじめとした民間信仰の神々が混在して信仰されていたために、菩薩像を取って造像しなくても、上記の神々がその役割を十分担っていたからこそ、菩薩像が造像されなかったとも解釈できる。」というその段階での見解を提出した⁽¹⁾。その後、2010年7月科学研究費補助金「ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究（研究代表者：龍谷大学・宮治昭教授）の研究会において「インドにおける菩薩像の様相：ガンダーラ、マトゥラー、アーンドラの比較を通して」においても、ガンダーラ、マトゥラーの菩薩像の造像の様相を含め考察した⁽²⁾。上記のように、筆者は近年アーンドラ地方の宗教美術の様相について調査・研究を行っている⁽³⁾。

そこで、2008/2009年に実施したアーンドラ地方の宗教美術の調査において、今回紹介する神像？彫刻が出土したパニギリ（Phanigiri）をはじめ、インド考古局（A.S.I）管轄およびアーンドラ・プラデーシュ州政府管轄の各考古博物館（アマラーヴァティー考古博物館（A.S.I）、Dep. of Archaeology & Museum, Andhra Pradesh, アマラーヴァティー州立博物館 The Amaravathi

Museum, パウダシュリー考古博物館（州立、グントゥール）、ナーガールジュナコンダ考古博物館（A.S.I）を調査したところ、9体の丸彫の神像らしき彫像が収蔵されていることが確認できた。これらの像は既に拙稿で部分的に紹介しているものもある⁽⁴⁾。そこで、本小稿では新出のパニギリ像を中心に、加えてこれまでに筆者が確認した丸彫の神像を紹介するのが本稿の目的である。

これらの像に関しては、D. M. シュリーニヴァサン（Srinivasan）、P. スキリング（Skilling）両博士が一部紹介しているが⁽⁵⁾、網羅的に紹介したものはない。本小稿はこれらの像をまとめて紹介するものである。特に、アーンドラ地方の仏教美術に関してはある程度の研究成果をおさめているが、仏教、ヒンドゥー教、民間信仰の様相は未だ不鮮明な部分が多く、またイクシュヴァーク朝以降のアーンドラ地方の宗教美術の様相も同様である。これらの像を探ることにより、アーンドラ地方の宗教およびその美術の様相を解明する手掛かりを提示できるのではないかと考えている。それはアーンドラ地方の4～5世紀の造形活動を跡づける作業ともなると考える。

1. パニギリ遺跡について

まず、新出の神像？彫刻が出土したパニギリ（Phanigiri）遺跡についてみていこう⁽⁶⁾。パニギリ遺跡はアーンドラ・プラデーシュの州都ハイデラバードの東、国道9号線を使って、スーリヤペットを経由し、そこから北西に35 km 程のところにあるナルコンダ地区のティルマラギリにある小村

(図1, 図中のAがパニギリ遺跡)で、遺跡はその村の北東の丘上にある。

この遺跡は1940年代、ニザム藩王国政府によって発掘が試みられ、その後アーンドラ・プラデーシュ州政府考古局により2001～2007年(4期)にかけて発掘が行われた。その発掘によって大塔、馬蹄形寺院、奉獻塔、列柱広間、僧院などが明らかとなった(図2-3)。第二期(2002～2003年)の調査報告により時代的にサータヴァーハナ朝(紀元前1世紀～紀元後2世紀)に創建され、イクシュヴァーク朝(紀元後3世紀)、ヴィシュヌクンディン朝(後4～5世紀)まで続いたとみられる。

浮彫などがある出土品は遺跡にはほとんど残っておらず、唯一《仏足石》が確認できる程度である(図4)。その仏足石は様式的にみて、アマラーヴァティー初期の様式に属するとみられる⁽⁷⁾。また、銘文のある八角柱も出土しており、そこには「イクシュヴァーク朝のルドラプルシャダッタ Rudrapurṣadatta 王の治世16年」の刻文が確認でき、また他の刻文の断片も紀元後1～3世紀に属するものが認められている⁽⁸⁾。また遺跡のある丘の小屋の中に建築断片を含めた瓦礫が収蔵されており、麓の村の収蔵庫には出土した仏陀像をはじめ、建築部材に表された多くの仏教説話図浮彫が多数保管されている。このパニギリ出土の仏教説話図については P. スキリング博士が紹介しており、《誕生》(図5)、《出家前夜》、《出城》、《四天王奉鉢》、《初説法》などの仏伝場面の他、《転輪聖王と七宝》(図6)や本生図と思しきメダイヨンなどが確認できる⁽⁹⁾。その他の出土品としては、ハイデ

ラバードの州立博物館および州政府考古局の展示室にもパニギリ出土の遺品が展示されている。

2. パニギリ遺跡出土の収蔵庫保管の神像？について

調査を実施した2009年2月の時点では本像はパニギリ遺跡の丘の麓にある村の収蔵庫に他の出土品とともに保管されていた(図7-a, b, c)。

本像(像高133 cm、像幅(最大)54 cm)は頭部、両手、両足欠損し、わずかに右手先のみが腰のところに置かれている(図7-a)。身体には豪華な装身具をつけている点が特徴である。首から胸にかけて、一連および四連の連珠のネックレス、恐らく宝石を嵌め込んだ幅広の装身具をつけており、また左肩からいわゆる聖紐(yajñopavīta)が下がっている(図7-b)。この聖紐の表現は後述するアーンドラ地方出土の神像においても見出されないもので、この像に特徴的なものである。故に尊格を同定する際の手掛かりになる可能性はあるであろう。また、本像の両足と台座(高さ62 cm 幅64 cm)は胴部と分断されながらも現存しており、本像が等直立であったことがわかる(図7-c)。その他、特筆すべき身体的特徴としては、本像の股間部が非常に強調されている点であろう。これは例えば、アマラーヴァティーにある州立博物館(The Amaravathi Museum)所蔵のコッタナンダヤパレム出土の《蓮華手ヤクシャ像》(図8)とも比較される。その体軀表現も非常に堂々とした逞しさは共通した造

形感覚が感じられる。

この像の様式については、アマラーヴァティー・ナーガールジュナコンダにみられるこの地方特有の造形様式が認められるものと同時に、明らかにその造形をもとに、一步進展した造形性を示すものが観察される。指先まで神経が行き届いた洗練された造形性を示している。特にアマラーヴァティー・ナーガールジュナコンダを中心に栄えた仏教美術以後、すなわち後4世紀中頃以降のこの地方の造形活動を物語る資料と言えるであろう。

パニギリ遺跡は、前述のようにサータヴァーハナ朝、イクシュヴァーク朝を中心としながらも、4～5世紀頃のヴィシュヌクンディン時代まで存続していたと考えられることから、このパニギリの像はまだ検討を十分要するが、恐らく4～5世紀頃のヴィシュヌクンディン時代に属するものではないかと思われる。他の同遺跡の出土品、例えばハイデラバード州立博物館蔵の《仏髪供養》《出家前夜》《出城》を表した仏伝図の中のシッダールタ太子(図9)と比較した場合、伝統的なサータヴァーハナ時代・イクシュヴァーク時代の造形性にはない、より洗練された造形感覚が認められよう。また、以前拙稿においてグディマッラム(アーンドラ・プラデーシュ州南部チットゥール地区)の《シヴァ・リング》について論じた際、この像を比較作例として提示したが、筆者はグディマッラムのシヴァ・リングの制作年代に比較的近いのではないかと現段階では考えている⁽¹⁰⁾。

また、このパニギリの丸彫像についての尊格であるが、現段階ではあまりよくわか

らないのが現状である。本稿は資料紹介的な性格が強いのので、明言を避けるが、スキリング博士は論文の中で、本像を簡単に記述し、「王侯立像」としている⁽¹¹⁾。確かに装身具等から判断すれば、王侯と解釈できないこともないが、ただ恐らく何かの神像であっても、王侯貴族の姿を基本とするので、現段階で「王侯か神か、あるいは菩薩か」という判断をするのは早計であろう。その尊格の問題は後述するアーンドラ地方出土の丸彫神像も含め、今後の課題となるであろう。

3. アーンドラ地方における丸彫神像について

以上、パニギリ遺跡出土の丸彫像を紹介した。本像の尊格については未だ不明である。その尊格の問題を解明する上でも、重要とみられるのが、次に紹介する近年筆者がアーンドラ地方で実見した丸彫神像である。それらの像を紹介しながら、パニギリ像が何者かを考えてみたい。

(1) アマラーヴァティー考古博物館

まずはアマラーヴァティー考古博物館所蔵の三例(①～③/図10- a, b, c)である。そのうち、①(図10- a)は頭部を欠くが、逞しい体軀を示し、右手には蓮華の切花を執る。本像は前述図8のコッタナンダヤパレム出土の《蓮華手ヤクシャ像》とも持物ともに体軀の表現等に共通性が見出され、「蓮華手ヤクシャ」とみられよう。

②(図10- b)は右手を欠くものの、頭部はターバン頭飾を被り、左手を屈臂し、腰帯の結び目に置いている。両耳には大きな

耳環をつけている。左右は異なるが、手を腰帯に置く仕草はパニギリ像とも共通する。③（図10- c）は頭部を欠き、持物も不明ながら、腰帯に手を置く仕草は①～③の像に共通する仕草であることから、これらの像は「ヤクシャ像」の可能性は十分あるとみられる。また、上記の3体ともにパニギリ像同様、股間部は非常に強調されている点も注目したい。

(2)ハイデラバード州政府考古局

Dep. of Archaeology and Museum,
Andhra Pradesh

ハイデラバードにあるアーンドラ・ブラデーシュ州政府考古局の展示室にあるイエレワラム出土の像である（④、図11）。この像も頭部を欠く。上記の①～③の像と比べると、体躯表現は非常に堂々とした逞しさは共通するが、立ち姿勢は②～③がいわゆる支脚遊脚であるのに対し、④は等直立である。特に注目されるのは両手の持物であろう。すなわち、右手に棍棒のような武器(gada)を執り、左手は腰に手を置いているが、その手に法螺貝を持っていることがわかる。この尊格の同定については次章で述べる。①～③像に比べ非常に正面観の強い像と言え、この像は恐らく信仰対象であったことは容易に想像がつくだろう。

(3)アマラーヴァティー州立博物館

The Amaravathi Museum

このアマラーヴァティー博物館には2体の丸彫像のトルソが展示されている（⑤～⑥、図12- a, b / acc.no.AM-36/38）。トルソ部分しか残っていないので、不明な部分が多い。特に、注目したいのはこの2体のトルソが出土した場所である。すなわち、

パニギリ遺跡のあるティルマラギリである。また様式的にみても、パニギリ像と酷似し、堂々とした体躯ながらも、上記の①～④に比べても、時代的に進展した造形性をみせている。そして、この二像も股間部は非常に強調したものとなっており、⑤の像はパニギリ像同様、左手を腰に置く仕草をとっている。ただ、パニギリ像にみられた聖紐の表現はみられない。しかしながら、⑤～⑥像は様式的にみても同時代であることは相違なく、恐らく一対の像であったことが考えられる。同一地域から丸彫の神像が出土している点は非常に注目される。

(4)バウダシュリー考古博物館（グントゥール）

ナーガールジュナコンダ考古博物館

まず、バウダシュリー考古博物館の⑦（図13）はエトヴァリパレム出土の像で、④像同様、等直立の像である。また、左手は腰帯の結び目に置いていたようであり、この手の仕草は上記の④像を除くいずれの作例にも共通するものである。両肩上に僅かながら耳環の表現が確認できるが、これも上記の丸彫像②④⑤の各像にも共通してみられる。

⑧のナーガールジュナコンダ考古博物館所蔵の例は①～⑦とは造形的な系統が異なるが、丸彫像である点共通するので、ここで扱うこととする。この像はイクシュヴァーク朝ナーガールジュナコンダの都城址第64址のヤクシャ祠堂から出土したとみられる像で、祠堂の本尊であった（図14）。胸から上しか現在残っていないが、丸彫像であることがわかる⁽¹²⁾。髪型はざんばら髪で、かっと思開いた大きな眼、大きな鼻、

歯を覗かせた厚い唇で、首には連珠の首飾りをつけている。

以上、アーンドラ地方出土の丸彫神像の作例をパニギリ像と比較しながら紹介した。これらの像、特に①～⑦像は少なからずパニギリの丸彫像と造形的にみて、共通点があることがわかった。また、尊格についてはヤクシャであることが確実な像もあり、また棍棒や法螺貝を執る像なども含まれ、尊格についての詳細はなお検討を要するが、概ね神像とみて問題ないと思われる。そこで次章ではこれらの像を今後考察する上で関連する作例および信仰に関する問題について触れておきたい。

4. これらの像は何者か？： Pāñcavira との関連

(1)南インド・アーンドラ地方における

Pāñcavira 像の作例

上記のパニギリ像をはじめ、3. ①～⑧の丸彫像を考える上で参考になる作例が見出される。それは現在、グントゥールのバウダシュリー考古博物館に所蔵されている、コンダモトゥ出土の《ナラシンハとパーンチャ・ヴィーラ像》を表した浮彫である⁽¹³⁾（図15、4世紀頃）。

この作例は横長の石板に中央に正面観のヴィシュヌの化身であるナラシンハを表し、右手でガダー、左手にチャクラ（円盤）を執っている。その左右に向かって左に2体、右に3体の像が表され、各像はターバン頭飾を被り、手には持物を執っている。また、このパーンチャ・ヴィーラはヴリシニー

(Vṛṣṇī)族⁽¹⁴⁾の5人の英雄のことであり、この5人の英雄神の同定については説が分かれる。すなわち、Lüders はジャイナ教の資料から、Baladeva, Akrūra, Anādhṛṣṭi, Sāraṇa, Vidūratha の5名に相当するとし⁽¹⁵⁾、Banerjea は Saṃkarṣaṇa, Vāsudeva, Pradyumna, Sāmba, Anirddha とする。後者の見解を採用する研究者が多いようである⁽¹⁶⁾。

このコンダモトゥ出土の5体のヴィーラ像の比定は Herbert Härtel 博士によりなされており、向かって左から杖と先頭に飾りのついた長いものを執るのが Saṃkarṣaṇa、左手に法螺貝を執るのが Vāsudeva、そしてナラシンハを挟んで、弓と矢の束を執るのが Pradyumna、胸前に杯を執るのが Sāmba、剣と盾を執るのが Anirddha とされている⁽¹⁷⁾。いずれの像もターバン頭飾や胸飾や臂釧・腕釧など装身具をつけ、体躯は非常に逞しく、前述のパニギリ像や3. ①～⑧の丸彫神像とも共通した造形性が感じ取られよう。

このコンダモトゥ出土のパーンチャ・ヴィーラ像の中で向かって左から2番目のヴァースデーヴァ像は左手に法螺貝を執る。このことから、3の④のハイデラバードにある州政府考古局所蔵の作例（図11）も左手に法螺貝を執ることからヴァースデーヴァと比定されよう。このように上記の丸彫神像の中にはヤクシャ像の他に、ヴリシニー・ヴィーラ像であるものが含まれていることがわかった。

(2)マトゥラーにおける丸彫神像

以上、パニギリ像をはじめ、アーンドラ地方から出土した丸彫神像と関連する作例としてコンダモトゥ出土の《ナラシンハと

パーンチャ・ヴィーラ像》(図15)を紹介し、少なくとも上記の9体の作例のうち、①～③はヤクシャ像であり、④は確実にパーンチャ・ヴィーラ像のうちヴァースデーヴァであることがわかった(図10- a, b, c、図11)。

次にアーンドラ地方以外で造形性を含め関連する作例を探してみると、マトウラー出土の像にアーンドラ地方の丸彫神像と造形的に類似した作例が3点見出される(図16～18、マトウラー博物館所蔵)。

まず一点目は武装した丸彫像で、ターバン頭飾を被り、耳には豪華なイヤリング、首から胸にかけて連珠の首飾りや胸飾をつけ、右手は欠損するが、左手に武器のようなものを執っている。体躯表現は堂々とした逞しいものである(図16、マトウラー博物館/ 00. E 7)。持物に武器らしきものを執る点は前述のコンダモトゥ出土のヴィーラ像と共通している。

もう2体はマトウラー郊外の西方11.2 km、ゴーヴァルダンへ通じる道の北へ3.2 kmの地点に位置する小村 Morā から出土した男性丸彫トルソ2体である(図17～18、マトウラー博物館、E 22/E 21)。いずれの像も頭部および両腕、両膝から欠いている像であるが、前述の武装像同様、逞しい体躯であり、下半身にドーティーを巻き、腰帯で留めている。そして、膝上には身体に掛けてある布の大きな結び目が垂下している。

この Morā という場所は、Morā Well 碑文が発見されたところで、石板に四行からなる碑文が刻されている。その碑文によれば、Mahākṣatrapa Rājūvula の息子の時代に尊き

Vṛṣṇī (Yadava 族の一氏族) の5人の英雄の像が、石の神殿に Toṣa なる女性によって奉安されたことを伝える⁽¹⁸⁾。現地からは神殿の遺構は跡付けられていないが、上記の2体のトルソおよび女身の立像下半部の断片(E 23)が出土している。よって、この2体の丸彫トルソがヴリシニー・ヴィーラ像である可能性は高い。こうしたマトウラーの像例をみると、パニギリ像およびアーンドラ地方出土の8体の像の様式は、マトウラーの造形様式を明らかに受け継いでいることがわかるであろう。また、Morā 出土の2体のトルソは、紀元後1世紀頃の制作とみられ、その体躯表現はマトウラー出土の菩薩像とも比較できうる造形性を有し、またポスト・マウリヤ時代の丸彫ヤクシャ像と比べ、規模としては小品ながらも非常に造形的には酷似していることがわかる。

(3)ヤクシャ信仰と Vṛṣṇī 信仰

以上、パニギリ像をはじめ、3の①～⑧の諸像においてその尊格についてはなお検討を要するが、前述のように明らかにヤクシャ像(図10- a, b, c)、英雄神(Vṛṣṇī)像(ヴァースデーヴァ、図11)と同定されるものも含まれる。そして、これらの諸像が同じ造形性に基づいて造られているのも確かであろう。かつて拙稿で前述のヤクシャ像や英雄神像について「ヤクシャなのか、英雄神なのか見分けがつかないほど酷似している」⁽¹⁹⁾という表現を用いたが、それは何故なのか？ この点については杉本卓洲氏や D. M. シュリーニヴァサンが指摘しているヤクシャ信仰と Vṛṣṇī 信仰の関連

性は興味深い。

まず、杉本卓洲氏はヴリシニー・ヴィーラ (Vṛṣṇī Vira) すなわち英雄神については前述の *Vāyu Purāṇa* (97. 1-2=Uttara 35. 1-2) の記述を挙げ、「本来的には人間なる神 (maṇuṣyaprakṛti deva)」であり、部族の英雄神として名声を博し、それは七仙 (saptaṛṣaya)、Kubera、Yakṣa、Maṇivara と等しかったことを指摘している⁽²⁰⁾。

また、D. M. シュリーニヴァサン⁽²¹⁾の指摘は次のようである。ヴリシニー・ヴィーラ (Vṛṣṇī Vira) 信仰はヤクシャ信仰の影響下で発展した。例えば、*Vishudharamottra Purāṇa* には Pañcavīra Yakṣa のグループが見出され、すなわち Dirghabhadra, Pūrṇabhadra, Maṇibhadra, Yakṣabhadra, Svabhadra である。この5ヤクシャが Vṛṣṇī Pañcavīra のモデルになったとも言われている⁽²²⁾。また、*Culla Niddesa* (『小義釈』) では、Vṛṣṇī Vira への信仰はヤクシャ信仰と同じレベルものであることを示し、そのテキストに記載される民間信仰の神々のリストには Vāsudeva/Baladeva (i.e. Saṃkarṣaṇa/Balarāma) の名が Maṇibhadda (Maṇibhadra) / Pūrṇabhadda (Pūrṇabhadra) の名前とともに連続して列挙されている⁽²³⁾。また、その信仰についてもヤクシャおよびヤクシーやヴリシニー・ヴィーラの信仰が同地域、同時に実際行われていたことを指摘している。例えば、中インド、ヴィディシャーのヤクシャ⁽²⁴⁾・ヤクシー像やベースナガルのガルダ柱 (いわゆる《ヘリオドロス柱》、Vāsudeva 信仰⁽²⁵⁾) や椰子 (tāla) の葉を象った柱頭およびマカラの柱頭⁽²⁶⁾ (ヴリシニー・ヴィーラ信仰) である。D. M. シュ

リーニヴァサンは以上の点を挙げ、ヤクシャとヴリシニー・ヴィーラの相互関係が強いことを指摘している。

上記の杉本卓洲氏、D. M. シュリーニヴァサンの見解は、恐らくヤクシャと英雄神における造形の類似性を解明する手掛かりとなるであろう。また、両氏の見解は今後、アーンドラ地方のヤクシャ像乃至ヴリシニー・ヴィーラ像を考察する上でも非常に有効なものとなる。本小稿は今後の為の予備的な研究であるため、指摘するだけに留めておきたい。特にアーンドラ地方の宗教美術に関しては近年の州政府考古局の発掘調査の成果も取り入れ、また仏教だけのコンテキストではなく、民間信仰を含めたヒンドゥー教の視座も取り入れなくては統合的な理解は難しいと思われる。そこで本小稿で紹介した神像を含め、アーンドラ地方の宗教美術の様相を考えなくてはならないだろう。

おわりに

以上、パニギリ出土の新出の丸彫神像を中心に、これまで筆者が調査したアーンドラ地方出土の丸彫神像も加え、紹介した。そして、後半部分では上記の作例に関連する作品資料や信仰に関する問題も整理した。

この種の像は従来、部分的には紹介されていたが、資料として公刊されている資料も少なく、実際現地に行ってみないと入手できないものもあり、これまであまり紹介はされてこなかったものである。特に南インド・アーンドラ地方の宗教美術の研究に関しては、これまで仏教美術が中心となっ

ており、その中ではこの種の造形は含まれていなかった。しかしながら、近年の当地方における発掘調査の成果が公表されるようになり、多くの仏像以外の丸彫神像がアーンドラ地方で信仰されていたことが予想される。

これらの像の中にはヤクシャ像であるものもあれば、ヴリシニー・ヴィーラのような英雄神像もあり、仏教尊像というよりは民間信仰的な性格を有した像で、それらが丸彫像として制作されている点が注目される。そして、前述のようにこれらの像がヤクシャ像なのか、ヴリシニー・ヴィーラ像なのかは非常に酷似しており、その理由として杉本卓洲氏、D. M. シュリーニヴァサンの研究を参照にしながら、ヴリシニー・ヴィーラの信仰はヤクシャ信仰のもと、発展しているため英雄神像の中にヤクシャ的な造形要素も含まれているため、その造形が非常に酷似していることが推察された。

また、本稿ではあまり触れなかったが、これらの像の中にはパニギリ像を含め、ポスト・イクシュヴァーク時代、すなわち紀元後4～5世紀頃に制作されたものがある。南インド・アーンドラ地方における宗教美術がサータヴァーハナ朝、イクシュヴァーク朝の仏教美術が主のものから、どのように変容してヒンドゥー教美術に移行していくかを解明する要素を少なからず有しており、今後アーンドラ地方の宗教美術をより具体的に理解するための手掛かりになる可能性がある。特にこの種の像は民間信仰的な性格もあるので、この点を無視してはインドの宗教美術の本質を理解できないであろう。特に南インドはこの後6世紀以降、

ヒンドゥー教美術が本格化するので、やはりアーンドラ地方の丸彫神像の存在は仏像以上に無視できない存在と言える。そういった意味でも、この本小稿で紹介した丸彫神像が南インドの宗教美術史の再構築へ向けての一助となれば幸いである。

[註]

- (1) 永田(2008): 80.
- (2) 永田(2011): 259-265. (発表は2010年7月11日)、永田(2012)(科研報告書)参照。
- (3) その他、アーンドラ地方のポスト・イクシュヴァーク朝のヒンドゥー教美術については、永田(2009): 131-147参照。
- (4) 永田(2008): 図19- a, b, c. 図20. 永田(2009): 図8, 9.
- (5) Srinivasan, D. M. (1997): 211-220, pl. 18. 2. Skilling, P. (2008): 96-118, esp. 99 & Fig. 10.
- (6) パニギリの遺跡についてはアーンドラ・プラデーシュ州政府考古局(Dep. of Archaeology and Museums, Andhra Pradesh, Gov. of Andhra Pradesh)のホームページを参照した(<http://museums.ap.nic.in/phanigiri.htm>)。その他、2001～2007年の発掘報告書も刊行されている。Reddy, P. Chenna (General ed.) (2008). 参照。遺跡と出土品の紹介はSkilling, P. (2008): 96-118に詳しい。
- (7) cf. Knox, R. (1992): cat.no.120(p. 211), 121(p. 213).
- (8) Skilling, P. (2008): 97-98, fig. 5.
- (9) Skilling, P. (2008): 96-118.
- (10) 永田(2009): 137. 筆者はグディマツラムのシヴァ・リング像の制作年代をポスト・イクシュヴァーク時代とみている。

- (11) Skilling, P. (2008): 99 & fig. 10.
- (12) このナーガールジュナコンダ出土のヤクシャ像と祠堂については永田 (2007): 91-95, 特に93.
- (13) 法量は高さ52 cm、幅116 cm、奥行14 cmである。
- (14) ヴリシニー(Vṛṣṇī)族とは Yādava 族の一氏族を指す。杉本卓洲(1983): 87.
- (15) Lüders, H. (1973): SS. 390-392. Banerjea, J. N. (1956): 93-94; 386.
- (16) 杉本卓洲(1983): 87.
- (17) Srinivasan, D. M. (1997): 241-242.
- (18) Quintanilla, S. R. (2007): 260-261, fig. 267.
- (19) 永田(2008): 78.
- (20) 杉本卓洲 (1983): 87. および註(19).
- (21) Srinivasan, D. M. (1997): 212.
- (22) 杉本卓洲博士も同様の指摘をしている。
杉本卓洲 (1983): 87.
- (23) 高楠順次郎監修(1940): 六十一～六十二頁。また *Mahāniddesa* にも同様の記述がある。
cf. Agrawala, V. S. (1970): 10-11, footnote1 (p. 11).
- (24) 肥塚隆・宮治昭(編)(2000): 挿図22参照。
- (25) この柱は刻文によれば、西北インド、タキシラのアンティアルキダース王から遣わされたヘリオドロスなるギリシア人が、自ら帰依したヴァースデーヴァ神のために建立したガルダ柱であることが判明している。
肥塚隆・宮治昭(編)(2000): 挿図18および57.
- (26) 椰子の葉の柱頭は Saṃkarṣana/Balarāma の幢(dhvaja)で、マカラの柱頭は Pradyumna の幢とみられている(Härtel の解釈)。
Srinivasan, D. M. (1997): 216. また、ベース

ナガルからはクベーラの住処を表したニヤグローダ樹を表した「劫樹柱頭」(cf. 肥塚隆・宮治昭編(2000): 挿図20)も出土しており、ヴィディシャー/ベースナガルにおいては丸彫彫像や柱頭の作例からヤクシャ・ヤクシー信仰やヴリシニー・ヴィーラ信仰が共存していたことがわかる。

[図版出典]

本稿で用いた図版は図1, 2, 18 以外は全て筆者の撮影である。撮影に関してはインド考古局およびアーンドラプラデーシュ州政府考古局にご協力を頂いた。この場を借りて厚く御礼申し上げます。なお、上記の図版の出典は図版キャプションに付してある。

[参考文献一覧]

〈洋書〉

- Agrawala, V. S. (1970): *Ancient Indian Folk Cults*, Varanasi.
- Banerjea, J. N. (1956): *The Development of Hindu Iconography*, Calcutta.
- Knox, R. (1992): *Amaravati Buddhist Sculpture from the Great Stupa*, The Trust of the British Museum
- Lüders, H. (1973): *Seven Brahmi Inscriptions from Mathura and its Vicinity*, Kleine Schriften, Wiesbaden, SS. 390-392.
- Quintanilla, S. R. (2007): *History of Early Stone Sculpture at Mathura, CA. 150 BCE-100CE*, Brill/Leiden・Boston
- Reddy, P. Chenna (General ed.) (2008): *Phanigiri A Buddhist Site in Andhra Pradesh (An Interim report 2001-2007)*, Department of Archaeology and Museums, Gov. of Andhra Pradesh (筆者未見)
- Skilling, P. (2008): *New discoveries from South India:*

The Life of the Buddha at Phanigiri, Andhra Pradesh, *Arts Asiatiques*, Tome63, 96-118.

Srinivasan, D. M. (1997): *Many heads, Arms and Eyes Origin, Meaning and Form of Multiplicity in Indian Art*, Brill.

〈和書〉

肥塚隆・宮治昭（編）（2000）：『世界美術大全集 東洋篇13 インド(1)』，小学館。

杉本卓洲（1983）：「Yakṣa と菩薩— Mathurā の仏教をめぐる—」『金沢大学文学部論集行動科学篇』第3号，79-108.

高楠順次郎監修（1940）：『南伝大蔵経 第四十四巻 小部経典22』大蔵出版，六十一～六十二頁。

永田（2007）：「南インド・アーンドラ地方におけるヤクシャ信仰の一側面—仏伝説話図にみるヤクシャ信仰の影響について—」『汎アジアの仏教美術』（宮治昭先生献呈論文集編集委員会編），中央公論美術出版，78-100.

永田（2008）：「南インド・アーンドラ地方の宗教美術の様相について—「なぜ菩薩像は造像されなかったか」を巡って—」『崇城大学芸術学部研究紀要』第2号，69-89.

永田（2009）：「南インド・アーンドラ地方におけるポスト・イクシュヴァーク時代のヒンドゥー教美術の様相についての覚書—グディマツラムのシヴァ・リングの制作年代を巡って—」『崇城大学芸術学部研究紀要』第3号，131-147.

永田（2011）：「インドにおける菩薩像の様相：ガンダーラ、マトゥラー、アーンドラの比較を通して」『ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究』（平成20～24年度科学研究費補助金（基盤研究（A））中間報告書），259-

265.

永田（2012）：「インドにおける菩薩像の様相：ガンダーラ、マトゥラー、アーンドラの比較を通して」『ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究』（平成20～24年度科学研究費補助金（基盤研究（A））（2013年3月刊行予定）

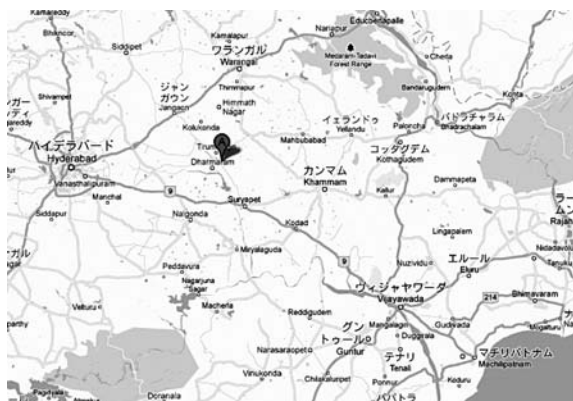


図1 パニギリ周辺地図
(図中のAがパニギリ遺跡、
Google Map [<http://maps.google.co.jp/maps?hi=ja&tab=w1>] より転載)

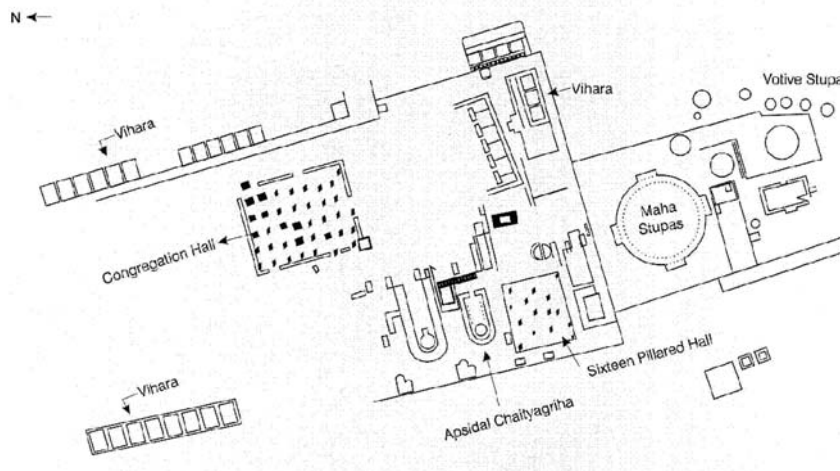


図2 パニギリ遺跡配置図
(アーンドラプラデーシュ州政府考古局ホームページ <http://museums.ap.nic.in/phanigiri.htm> より転載)



図3 パニギリ遺跡
2基の馬蹄形寺院から主ストゥーパを眺める。(筆者撮影)



図4 馬蹄形寺院付近の仏足石 (筆者撮影)



左 図5. 《誕生》パニギリ遺跡麓の収蔵庫（筆者撮影）



右 図6. 《転輪聖王と七宝》同収蔵庫（筆者撮影）



左 図7-a. 《丸彫神像》、パニギリ遺跡麓の収蔵庫（筆者撮影）



右上 図7-b. 同部分（上半身部）、同収蔵庫（筆者撮影）



右下 図7-c. 同部分（脚部および台座部分）、同収蔵庫（筆者撮影）

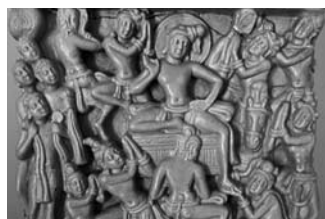


図9 《出家前夜》部分
パニギリ出土、ハイデラ
バード州立博物館（筆者
撮影）



図8 《蓮華手ヤクシャ像》
コッタナンダバレム出
土、アマラーヴァティー
州立博物館（筆者撮影）



左 図10-a ①丸彫蓮華手像（正面／背面）
 右 図10-b ②丸彫神像（正面／背面）
 下 図10-c ③丸彫神像（正面／背面）
 アマラーヴァティー出土、アマラーヴァティー考古博物館（筆者撮影）



図11 ④丸彫神像
 イェレワラム出土、ハイデ
 ラバード州政府考古局（筆
 者撮影）



図12-a, b ⑤⑥丸彫神像
 ティルマラギリ出土、アマラーヴァティー州立
 博物館（筆者撮影）



左 図13 ⑦丸彫神像
エトラヴァリパレム出土、パウダシュリー考古博物館（筆者撮影）



右 図14 ⑧丸彫ヤクシャ像
ナーガールジュナコンダ出土、ナーガールジュナコンダ考古博物館（筆者撮影）

下 図15 ナラシンハとパーンチャヴィーラ像
コンダモトゥ出土、パウダシュリー考古博物館（筆者撮影）



図16 武装神像
マトゥラー出土、マトゥラー博物館（筆者撮影）



図17 トルソ
モラー出土、マトゥラー博物館（筆者撮影）



図18 トルソ
モラー出土、マトゥラー博物館（筆者撮影）
（Quintanilla, S. R. (2007): fig.278より転載）